



応都物語

霧和郁王

エピローグ

暗闇...

あの音はなんだろう。

ザザーーン..... ドドドォーン...

目を、開ける。

真っ青な空。真っ白な雲。目の前一面に広がる大きな波、小さな波、波、波、波...

ザザーン...耳に心地よく、ドドォーン...身体の奥に響いてくる。

ツンと鼻につく匂いが懐かしい。

誰かに手を引かれて歩いている。サク、サク、サク、砂が裸足に心地いい。

アォウ！アォウ！アォウ！声に驚いて上を見上げる。

遠くに何かとても大きな存在を感じる。

誰かに教えてあげなくちゃ...誰に？

ゆらりと身体が揺れる。

瞬きと共に、景色が変わる。

薄暗い森の中に立っている。

暗闇の中に大きな樹が見える。

天まで届く大樹。上の方は霞んで見えない。幹は途方もない太さだ。

地面は太い根が張りだして盛り上がっている。

大樹の太い幹にもたれて座り、心地よい安心感に浸る。

ただこうすれば良かったのだ。

なにも心配することはない。

誰かが座っている。

そうだ、私はここを知っている。

この樹を知っている。

あのひとの事も知っている。

そしていつも、

駆け出すと夢が醒めることも知っている。

オノカとザティ

むかしむかし、ではないかもしれない。
はるか先の未来、でもないかもしれない。

そんなところに「応都」の世界は存在していた。

応都は広大なひとつの国家であり、大小さまざまな島々から成り立っている。
国の境は未だはっきりせず、船を操る勇敢な人々が数えきれないほどの冒険を繰り返して来た。

応都の西のはずれにロイテ島という小さな島があった。島民は100人足らずだが航海中の船の修理や補給所として賑わっている。人々は修理工や農業、酪農を生業としていた。
この小さな島のはずれの小さな家に、オノカとザティという姉妹が祖母と暮らしていた。

正確には一体のアンドロイドと一匹の犬も一緒だった。

オノカとザティには祖母に育てられてきた記憶しかなかった。
ロイテ島は小さな島であり家々とはみな親しい知り合いだった。島に幼い子供はオノカとザティの他にはいなかったため、二人に村人たちは深い愛情を寄せて共に育ててきたのだった。
二人が成長するとともに祖母は病気がちになった。今ではほとんど言葉が口からでてこなくなり、ベッドで過ごすことが多かった。
姉のオノカは物を作り出すことが得意だった。母屋の隣にある二人が「工房」と呼んでいる小屋にいつも籠ってなにかしら作っていたり、家の修理をしたり、島中を探索したりしていた。
妹のザティは家事を取り仕切ることが好きだった。家を整え、日々の料理をし、家畜の世話をし、畑で野菜や果物を作ることに喜びを覚えた。
それで日々の暮らしはうまい具合に回っていた。

今日もザティはいつものように日の出前から起きて畑へ出ていた。野菜や果物がたわわに実っている畑はザティの誇りだった。ふと目を上げると島を囲む雲がオレンジ色に染まっている。夜明けだ。

ロイテ島の朝は美しかった。太陽が雲の上に昇り始めると光に照らされて雲がキラキラと光り出す。島中が銀色の光に包まれる瞬間がザティは好きだった。
朝日がザティのすらりとした姿を照らす。茶色い長い髪は編み込んでひとつにまとめていた。髪と同じ色の瞳は長い睫毛に囲まれ輝いている。薔薇色の唇はいつも大胆な笑いに溢れていた。
ザティはごく美しい10代の少女だった。
ワウ！ワウ！

白い大きな犬が畑にやってきた。

「ビエリ！いいところにきてくれたのね。」

ビエリという名の大きな犬は物心ついたときから側にいる。オノカとザティに忠実につかえる頼もしい存在だった。

今日はいつもより収穫した野菜と果物が多いのでどうしようかと思っていたところだった。ビエリはいつもザティが困っている事を察したかのように来てくれる。

ザティはビエリの大きな背中を借りて荷物を支えながら家に向かった。

家の前に来るとアンドロイドが庭を掃いていた。

「カミュ、その調子よ。庭を掃くのは上手じゃない。」

カミュという名のアンドロイドは姉のオノカがガラクタから作り出した傑作だった。

寄せ集めの材料から作ったので見た目はいわゆる旧型のアンドロイドだ。ロイテ島にやってくる大型船には最新のアンドロイドも乗せられてくることがあったがカミュの見た目はそれとは全く違っていた。

もともとは家事が苦手なオノカが自分の代わりにさせようと作ったのだが、なぜか家事をさせると何かしら惨事をひきおこしてしまう。何度プログラミングしなおしてもうまくいかなかった。アンドロイドってそんなものなのかしら？とザティは思った。もっと万能で便利なものかと思っていたのに。

家事をこなすのが好きなザティはカミュに頼む事はなかった。カミュは家事より調べ物に役に立った。今日の天気や島に向かっている船のことなど、聞くとすぐに答えが返ってくるのは便利だった。

朝食ができてオノカは起きてこなかった。今日はオノカも港に行くと言っていたのに。

「カミュ、オノカを起こして来てよ。」

祖母はビエリにつきそわれながらゆっくり食卓につくところだった。

「今起こしてもオノカは95%起きません。」

カミュの情報はいつもなかなか正確だったのでザティはあきらめた。

ザティは港で働いていた。港ではザイショウという男が直し屋と謳って小さな物から船のエンジンまでの修理を稼業としていたがその妻のトゥクタンが営んでいる雑貨店と食堂をザティは手伝っており、いまではなくてはならない存在となっていた。今日は大型船が港に着いていることをカミュから聞いていた。忙しくなりそうだと思うと自然と笑みが浮かぶ。

しっかり者のザティは稼ぐのが好きだった。船員の荒くれ男達の扱いには慣れていた。彼らはザティが笑いかけると気前よくお金を使う。

食事が終わるとザティは体調の良さそうな祖母をビエリに任せ、いつも通り子馬に荷物を乗せて出かける事にした。

「おばあちゃん、行ってくるね。」

ザティが声をかけると祖母は首の所を指差した。

「大丈夫、お守りはちゃんと持ってるわ。」

ザティは首にかけてあるペンダントを握りしめてみせた。

「じゃあ、行くわ。オノカを起こしてね！」

カミュに声をかけ、荷物を乗せた子馬の手綱を引くと軽やかな足取りでザティは出かけて行った。

やがて日もだいぶ高くなった。

母屋のすぐ隣に古ぼけた「工房」が建っている。

姉のオノカはたいていここにいて何かしらの作業に夢中になっていた。夜通し作業することもよくあることで、そんなときは工房の片隅にしつらえた小さな寝床で眠るのだった。

今朝もオノカは工房の寝床でまだぐっすり眠っていた。

「オノカ！いい加減起きて！」

とうとうカミュがオノカを起こしにやってきた。

「アダマ船長の船はもう港に入ってますよ。気流の関係からみると今日の午後には出発するでしょうね。」

アダマ船長の船と聞くとオノカは飛び起きた。肩まで届くか届かないかの髪の毛はあちこちに飛び跳ねていた。

慌てて出かける支度をするオノカの後ろをカミュと一緒に連れて行けとつきまとう。

「あんたにはおばあちゃんの世話をしてもらいたいのに」

「私のプログラミングは家事に向いてないといつも言ってるじゃないですか。それに、アダマ船長の船が来てるならいい部品が手に入るかもしれません。」

うーん、と唸るオノカ。部品、と聞いて考え直す。正直、カミュの部品は欲しい。

家畜の番とおばあちゃんの世話はビエリに頼んだ方がよっぽど確実だわ。

オノカは工房の真ん中に置いてある小さな舟に目をやった。寝過ごしたのは遅くまでこの舟にとりかかっていたからだった。ガラクタの山から発掘した浮遊材に小型のエンジンをつけ、帆で舵をとる小さな舟。試作品なので一人乗りなのだがカミュがうるさいので無理矢理乗せて行くしかない。港までならなんとかもつだろう。

「おばあちゃん、行ってくるね。」

オノカは家の中をのぞきこみビエリの頭を撫でながら祖母に声をかけた。

祖母は首の所を指差した。

「大丈夫、お守りはちゃんと持ってるよ。」

オノカは首にかけているペンダントを握りしめてみせた。

「ビエリ、あとはお願いね！」

ワウ！ワウ！ビエリが頼もしく返事をし尻尾を振ってオノカを見送った。

オノカは青い空に目を細めた。

「うん、絶好の試運転日和！」

カミュに手伝わせ工房から船を引っ張り出す。

数十センチ浮いている舟にカミュを乗せ、オノカは押して駆ける。そのままエンジンをかけ飛び乗って帆をつかんだと同時に舟は丘の上から飛び立ち風に乗った。

オノカたちが暮らす小さな母屋と工房がゆっくり下へ遠ざかって行く。バランスをとるためにカミュと向かい合って立ち帆のレバーを持たせた。自分は舵に集中する。

「うまくやってよね！」

舟は危なげに空中を上がったり、下がったりを繰り返していたが、そのうち突然回転しながら急降下した。

「まずい！」

オノカの目の先には一軒の農家があった。ぶつかるまいと必死で舵をとる。間一髪で家の横をすりぬけ、はためく洗濯物の中をつつきり、そのまま畑へ向かい藁を散り散りにしてしまった。

しかしそのあとは舵が言う事をきいてくれるようになった。オノカは試しにゆっくり農家の周りを飛んでみた。驚いた住民が窓から顔を出す。畑にいた農夫もあっけにとられた顔でこっちをみている。

「サンドウおじさーん、おばさーん、ごめんなさーい！」

「おや、オノカかい、あとでジャムを取りにおいでー」

二人に大きく手をふるとオノカはどんどん舟を上昇させた。

「やれやれ、オノカはいくつ命があっても足りんなあ。」あきれたようにつぶやきながらも農夫は愛情を込めた目でオノカの姿を追った。

オノカは島を離れ雲の海へ舟を向けた。だいぶ扱いにも慣れてきた。このまま島の外周を回ってから港に向かうことにした。

「浮遊材ってやっぱり難しいのね」

オノカは舟の床を踏み鳴らしながら言った

「もとが何の部品だったかわからないですからね。」

「ガラクタの中からでてきたんだもん、しょうがないわよ。それでもあんたを乗せている割にはよく飛んでるわ...」

ひゅうっ！とオノカは口笛を鳴らした。雲間からいきなり見馴れた古い大型船が視界に入ってきた。

「あいかわらずデカくてボロいね！」

船の周りを一周して港に入ろうとするとなにやら喧騒が聞こえてきた。

「ザイショウとアダマ船長、またやりあってる。」

オノカとカミュは船の陰に隠れて港の様子を覗き込んだ。

二人の大男が睨みあっている周りを男達が囲み面白がってはやし立てていた。

「けっ！てめえの船がオンボロすぎるんだよ！これ以上治せるところなんざぁねえや！この直し屋ザイショウが保証するぜ！」

ザイショウは背の高いがっしりとした中年の男だった。ロイテ島の直し屋ザイショウの名は船乗り達の間では知れ渡っていた。エンジンに関してはひろく応都をさがしてもザイショウの工房の

右に出る者はいないと言われていた。そのためロイテ島を取り囲む危険な気流を乗り越えてまでもやって来る船は少なくなかった。つまりはいいエンジンを持った大型船しかロイテ島には辿り着けないということになるのだが。

「へっ、負け惜しみかよ！直し屋ザイショウも腕が落ちたな！あのオノカとかいう小娘の方がまだマシじゃねえか！」

負けじとザイショウに怒鳴り返す男は港に停泊中の大型船の船長でアダマ船長と呼ばれていた。船長の中でも悪名高い男でオノカは好きではなかったがザイショウはいつも俺はあの船とエンジンに惚れてるんだと言うのだった。

二人のやりとりを耳にしてオノカはくすりと笑った。

「行くよ、カミュ！」

オノカは再び舟を操ると風の流れに乗って一気に大型船の後方ハッチから乗り入れた。船内には人の気配がしない。みんなトゥクタンの店で飲んだくれてるのだ。慣れた足取りで船の下方へ続く階段を降りて行くオノカにカミュが続く。下まで降りるとあたりは蒸気やら煤混じりの黒煙やらで視界が悪い。ムセ込みながらエンジンルームへ進む。

入り口の工具の山の辺りに一人の少年が座って居眠りをしている。オノカはこつんと少年の頭を小突いて声をかけた。「ドゥビ！」

呼ばれた少年ははっと目を見開いた。「オノカ！カミュ！」

「コウ爺は？」

「あっち。手こずってるよ。今回はかなり悪いな…。境界の乱気流越えられないかと思ったよ。ここについてからコウ爺はずっとかかりっきりでさ…。気流の流れが変わるから午後にはでないとまずいんだ。」

ドゥビはこの船のエンジン工見習いで、悪名高いアダマ船長とガラの悪い船員達に囲まれて暮らしているにもかかわらず純朴な少年だった。

「相変わらず元気そうだね、オノカ。そうだ、またカミュにつかえそうな部品持ってきたよ。」

「果ての捨て場に行ったの？いつかあたしも行ってみたいなあ。」

「あっはは！あんなところ、行くもんじゃないよ。俺はコウ爺とじゃなければ絶対に行きたくないね。」そう言いながらドゥビは工具の山をかきわけて箱を探し出した。中にはなにやらごちゃごちゃとした機械類が入っている。一見ガラクタだがカミュはさっそく身を乗り出して吟味しはじめた。

「あんた自分で探しててよ。」

手袋をつけながらカミュに告げるとオノカは小さな台車に仰向けになりエンジンの下へ潜っていた。

エンジンの奥で作業している老人の横にピタリとオノカがつく。

「おう、来たか。」煤だらけの気難しい表情がたちまちゆるむ。

「コウ爺！久しぶり！」嬉しそうにオノカは声をかけた。二人は古い友人なのだった。

コウ爺と呼ばれている老人はこの船のエンジン工で、船のエンジンに関してはザイショウでさえまだまだかなわなかった。コウ爺はこの船とエンジンにすべてを捧げていた。悪名高いアダマ船

長もコウ爺には頭が上がらなかった。

コウ爺は幼いオノカがザイショウにくっついてこの船に乗った頃から可愛がり、エンジン室にオノカを入れて色々なことを教えてくれたのだった。

「今度はどこが悪いの？ザイショウは無理だって言って船長とやりあってる。」

「カッ！ハハハハ！！」

コウ爺はところどころ歯が抜けている口を大きく開けて笑った。

「そうとも、今回はなかなかだぞ、ザイショウも匙を投げたよ。やってみるか。」

「もちろん！」

コウ爺とオノカはかなりの時間をかけてあちこち開けては閉めたり、部品の交換を繰り返した。やがてオノカがある箇所を閉めたとたん、足下の機械からシューと白い煙が上がる。顔を見合わせるオノカとコウ爺。やがて二人はニヤリと笑う。

一方、ガラクタからなにやら戦利品を見つけたカミュは興奮していた。

「へえー、こんなもん、何になるんだ？」

「まさかこれは...！はるか昔に製造中止になり手にいれることも禁止となった幻の...。」

そこへ突然コウ爺の声が飛んできた。

「ドゥビ！バルブだ！エンジン始動！」

「ええ！？」

ドゥビは飛び上がると慌ててヘルメットとグローブをつけ大きなバルブの元へ行った。

慎重にバルブを開ける。メーターの針の揺れを見ながらゆっくりバルブを回す。

やがてコウ爺とオノカが戻ってきてエンジンレバーを引きスイッチを押すといきなり爆発音のような音が辺りに響き渡る。

「よーし、いいぞ、オノカ、そのままゆっくりレベルを上げて行け。」

「はい！」

「俺まだ休憩してないのに…」ドゥビが情けない声を出した。

港では未だザイショウと船長が睨みあっていた。

突然辺りに大音量が響き渡り、船から汽笛が鳴り響く。

驚いて船を見るザイショウと船長。トゥクタンの店で飲んだくれていた男達の動きが一瞬止まる。

「出航だ！」

誰かの言葉を合図に店にいた男達は慌てて船に向かいだした。

「おっと！お会計！」

慌てふためく男達から容赦なく代金を取り立てていくザティ。

レジには品物を買収する男達でごった返し、ザイショウの妻トゥクタンが手際よく対応している。

続々と船員達が船に乗り込んで行くのを呆気にとられた顔で見っていた船長だったがはっと我に返りギロリとザイショウを睨み付ける。

そこへ再び大音量で汽笛がなった。

「おーい！俺を置いていくんじゃねえ！」

ついにあきらめてアダマ船長も船へと走り出した。

船を降りたオノカは急いでトゥクタンの店へと向かった。

「ザティ！コウ爺達のももらうね！」

飲み物と食料を袋に詰め込むオノカを厳しい目で見ながらザティが言う。

「代金は？」

「あたしのおごりよ。」

肩をすくめて笑うとザティはさらに飲み物の瓶と大きな包みを袋に入れてやった。

「ザティ、いいの？ありがとう！」

オノカは袋をかかえると再び港に戻る。

船は今にも出航しようとしているところだった。乗組員たちでゴった返している入り口から船内に入り込むとオノカはまっしぐらにコウ爺達のいるエンジンルームに向かった。

「コウ爺、ドウビ、これ！」差し入れの袋をドウビの脇に置く。

「やった！オノカ、恩にきるよ！」

コウ爺はエンジンの調整に忙しい。

「なんだ、オノカ、もう出航するぞ。乱気流を越えるなら今なんだ。」

オノカの足が止まる。

いつも、このままコウ爺達と飛び立ちたい、という衝動に駆られるのだった。

そんなオノカを見透かしたようにコウ爺は言う。

「さあさあ、行った行った！なあに、ひでえ船だ、じきにまた世話になるさ。」

「船は素晴らしいわ。あいつが、アダマ船長が最悪なだけよ。コウ爺、また絶対に来てね。」

船がさらに轟音をたてる。

ついにオノカは飛び出し、階段をかけあがり後方ハッチに置いたままになっていた自分の舟を押しながら駆け、エンジンをかけると飛び乗った。ハッチからオノカの舟が飛び出すと同時に船のエンジンが火を吹き、ゆっくりと遠ざかっていく。

港ではカミュがオノカを待っていた。

「カミュ、今度の戦利品は何なのよ？」

「今度はすごいですよ！今ではもう開発されてないんです。かなり古いですがメンテナンスすれば問題なく使えます。前から欲しいと思っていたんです。本物ならこれは幻の...」

「そうなの？じゃああとでさっそくメインにつないでみようよ。」

トゥクタンの店に着くと、入り口に人だかりができています。オノカはザティを見つけ出すと声を

かけた。

「ザティ、何かあったの？」

「中に知らない子たちがいるの。ぐっすり寝ちゃってて。」ザティは声を潜めた。「あの船に乗ってたのよね、きっと。置いていかれちゃったの？」

オノカは人混みをかき分けて店の中に入っていった。慌ててザティも後を追う。

薄暗い店の一番奥の席で、二人の少女が肩を寄せ合ってぐっすり眠り込んでいた。

「今日は忙しくて、あたしちっとも気付かなかったのよ。ほら、一番奥の席でしょう、隣にずっとデカイ船員がいたから見えなかったんだわ。」

少女達を前にしてザティが言った。

100人足らずのロイテ島の住人は全員顔見知りだったから、見知らぬ少女達が船に乗って島にやって来たことは明らかだった。

でもどうして？オノカは不思議に思った。これまでこんな事はなかった。島に来る船は貨物船だけで、乗っているのは荒くれた船員の男達ばかりだった。

二人の少女は自分とザティとたいして年は違わないかに見えた。テーブルの上には何ものっていなかった。出航前のあの騒ぎにも気づかず、何も食べずに眠っているなんて、どれほど疲れていたのだろう。寄り添って眠っている二人を見てオノカは胸が締め付けられた。

ふと、少女の一人が目を開けた。オノカの顔をじっと見つめる。肩の辺りで切り揃えたまっすぐな黒い髪がさらりと揺れ、そっと周りを見渡すとやがてはっと我にかえりまだ寝ているもう一人の少女を揺さぶった。

「ルニノ、起きて、ルニノ！」

ルニノと呼ばれた少女の方が年上のようにだった。眠そうに目をこすっている。妹と同じ黒髪は腰の辺りまであった。

「あのう、あなたたち、あの船に乗ってきたの？」オノカはゆっくり声をかけた。

二人は顔を見合わせると再びオノカを見て小さく頷いた。

「船はもう出航してしまったわ。あなたたちは...どうしてあの船に乗っていたの？」

少しの沈黙の後、年上の少女が口を開いた。

「船が...出航したの？」

「ええ、ついさっきよ。」

オノカの言葉を聞くとその少女はぐったりと背もたれにもたれかかったまま目を閉じてしまった。二人はお互いの手をぐっと握りしめている。

オノカとザティは顔を見合わせた。

エン爺はきっと知らなかったに違いない、とオノカは思った。もし知っていたらきっと二人のことを話してくれていたはずだから。

いつの間にか店内を覗いていた人々はいなくなっていた。トゥクタンが人々を追い払ったのだった。カミュとビエリは心配そうに入り口から覗いていた。ザイショウも店に戻ってきていた。トゥクタンが優しく二人に声をかけた。

「船はもう戻ってはこないよ。よかったらあんた達のことを聞かせてくれないかい？それからどうするかみんなでお考えようじゃないか。」

少女たちは顔を見合わせ、やがて年上の少女が口を開いた。

「私はルニノと言います。この子は妹のナキトゥ。そう、私たちはあの船に乗っていました。首都カピタリに行く途中だったんです。」

「カピタリ？」思わずオノカは繰り返した。「首都カピタリのこと？」

「ええ。」ルニノは小さく頷いた。「私たちが住んでいた町はとても小さくて、貧しいのです。だから船賃の代わりに船で働かせてもらっていました。

船に乗るのは初めてで、仕事にはなかなか慣れなくて...今日は町を出発してから初めて港に寄った日だったんです。船乗り達についてきたらこの店について...そして...私たち...いつの間にか眠っちゃって...。」

ルニノの声が震えた。「どうしてこんなことになっちゃったのかしら...。私たち、どうしてもカピタリに行きたいんです。」

広大な応都の国といっても首都カピタリの名はオノカとザティも知っていた。ロイテ島の港に寄る船の中にはカピタリを目指す航路もあったがここからあまりに遥か遠くの地であったためオノカはこれまでそれほど認識していなかった。

「ふむ...ここんところカピタリ行きの船が増えたなと思っていたんだが、首都で何か動きがあるのかい？なんでまたあんたたちみたいな子供がカピタリを目指しているんだい？」それまで黙って聞いていたザイショウが口を開いた。

「あたしたち...あたしたち、どうしてもカピタリに行きたいんです！」ナキトゥが思いきったように言った。「お願いします！あたしたちを助けて...」「ナキトゥ！」ルニノが遮った。

そこヘトゥクタンが割って入った。「まあまあ、あんたたち、お腹がすいてるんじゃないのかい？かわいそうに、アダマ船長の船じゃろくな食べ物にはありつけなかつただろうよ。もう話は十分だよ。まずはたっぷりお食べ。そしてその後はゆっくり休みなさい。ザティ、頼むよ。」

ザティが手際よく暖かいスープとパンを運んできた。「特製スープよ。おかわりしてね。」

二人は顔を見合せ、それから同時にゆっくりスプーンを口に運んだ。ひとくち食べると二人の顔がパッと明るくなった。もうひとくち、もうひとくちとスプーンを口に運ぶ。

本当にろくな食事をさせてもらえなかったのに違いない、とオノカは思った。アダマ船長め、次に来たら思い知らせてやる。

「パンも焼きたてよ。それからこれは今朝私の畑で採れた果物。」ザティはみずみずしい果物もテーブルに並べた。

ふっくら焼けたパンを頬張るルニノの口の動きが止まる。ルニノは泣いていた。泣いて、食べ続けることができなかった。その横で、ナキトゥが黙ってルニノの手を握りしめていた。

オノカとザティは顔を見合せた。二人きりにしてあげようと思った。

「あの...ゆっくり食べてね。あたしたち、あなたたちが休む場所を用意してくるわ。何かあったらこのカミュとビエリに言ってね。」ザティが二人に告げるとカミュは礼儀正しく頭を下げ、ビエリは尻尾をパタパタと降った。

店の二階はザイショウとトゥクタンの自宅になっている。すでに一部屋をトゥクタンが用意してくれていた。ベッドを作りながらオノカはザティに聞いた。「ねえ、首都カピタリのこと、どう

思う？」

「最近船乗りたちがカピタリのことをよく話しているからあたしいろいろ聞いているのよ、面白いわよ。みんな、カピタリに行けばやりたいことは何でもできるらしいって言ってるわ。」

「ええ？首都ってそんなところなの？」オノカは知らなかった。「やりたいことが何でもできるってどういうこと？」

「それが、まだほんとうにカピタリに行ったことがある船乗りにはあったことがないからよくわからないんだけど...カピタリは閉鎖都市になるらしいわ。なんでも.....理想の都市を目指しているとかで.....今は首都の住民になりたい希望者を受け入れているけど、そのうち新たにカピタリの住民になることはできなくなるみたいよ。首都の住民になれば安定した生活が保障されるんだって。だから船乗り達の中でももっぱらの噂になってるわ。船乗りは貧しい街の出身が多いからね。」ザティは詳しかった。

「それじゃあ、あのルニノとナキトゥの二人も首都の住民になるのを目指してるってこと？」

「う〜ん、わからないけど.....。でも船に置いていかれてあんなにがっかりしているじゃないの。」

オノカはまだよくわからなかった。応都には大きな都市がいくつも点在していてそれぞれの都市の周辺地域ごとに繁栄していた。ロイテ島は応都の外れに位置しているためかこれまで首都カピタリと関わることはほとんどなかった。閉鎖都市なんて聞いたことがない、いったいどういう都市を目指しているというのだろう、どうして人々はそこに行きたいと思うのかしら。オノカの頭の中はぐるぐる回った。

再び下へ降りていくと、少女たちはにこやかにカミュとビエリにもてなされていた。

「さあ、二階へ行ってお休みなさいな、あたしたち、明日また来るわ。」オノカはビエリを撫でてやった。

「ありがとう。なんてお礼を言ったらいいのかしら.....。それと、素晴らしいお友達ね。」ルニノがカミュとビエリの方を見ていった。その瞳を見て、オノカはこの二人とは親しくなれそうだなと思った。特に、ルニノと。

「あたしたち、あの子たちと仲良くなれる気がしない？」帰り道は舟を引いて歩いていたオノカが言った。

「あたしもそう思った。かわいそうだけど...いい子たちみたいね。」

「カミュを褒めてくれたわ。」オノカにとっては大事なことだった。

翌朝ザティはいつものように朝早く起き、家事を済ませてからトゥクタンの店へ向かった。オノカはザイショウから仕事を頼まれていたので今日は寝坊はしなかった。ビエリとカミュには留守番を頼むことにした。カミュは大いに不満を訴えたが、帰ったら昨日の戦利品をメインにつないでやるからとようやくなだめたのだった。

オノカは舟を出し港まで遠回りしながらエンジンと舵の具合を確かめた。今日は一人乗りだったので昨日より調整がしやすかった。

港にあるザイショウの工房の前へゆっくり着陸するオノカをザイショウが外へ出て興味深そうに

眺めている。

「ほう、それが浮遊材使ったっていう新作か。」ザイショウは舟に近寄るとあちこち眺め始めた。

「そう、扱いが難しいんだけど...今日のでだいぶ慣れてきたわ。エンジンとのバランスがまだうまく調整できなくて。」

「浮遊材がこの島にもあったとはな。どれ、ちょっと見せてみる。」

「昨日の子たちは？」

「なあに、元気なもんさ、朝から女房と一緒になにやら愉快そうに働いていたよ。」

そう言うとザイショウは舟を工房に引き入れ、その後は舟にかかりっきりになった。

小さい時からザイショウにくっついて過ごしてきたオノカは今ではザイショウの片腕となって仕事をこなすようになっていた。ザイショウとの直し屋の仕事は面白くて仕方がなかった。オノカはすべての物のしくみに興味があった。そして物を造り出すことが好きだった。

仕事の依頼は小さな棚の修理から船のエンジンまでと範囲が広がったが今ではオノカはエンジンに関しては時々ザイショウをもうならせる腕前にまでなっていた。

今日は工房に壊れた荷車が持ち込まれていた。昔から使われてきた道具を直すのは面白かった。

いつの間にか昼時になり、ザティがルニノとナキトウを連れて昼食の差し入れにやってきた。

「二人がね、ザイショウの工房を見たいっていうから。見て、この素敵なお弁当。ナキトウはとっても料理が上手なのよ。それをルニノがこんなに素敵に詰めてくれたの。」

妹の方が料理が上手いというのは私たちと似ているわとオノカは面白かった。素敵に盛りつけるセンスはオノカにはなかったが。姉より妹の方が背が高いところも一緒だった。

「夕べは眠れた？」弁当に手を伸ばしながらオノカは二人に聞いた。

「ええ、とっても。」ルニノが朗らかに言った。昨日の沈んだ様子とは大違いだった。

「あたたち、旅に出てから初めてあんなにぐっすり眠ったわ。」

「まあ、アダマ船長の船じゃね。」顔をしかめながらオノカはサンドイッチを頬張った。

「美味しい！」

「よかった！材料がとにかく素敵で。久しぶりに料理が楽しいと思ったわ。」ナキトウはほっとした顔で自分もサンドイッチを手にとった。

暫く皆で食事を楽しむとザティとルニノは店に戻っていった。

ナキトウは工房にとっても興味を示し、オノカが午後は舟の試運転をするというに残りたがった。

ナキトウは何にでも興味をもち、面白がり、そしてとても手先が器用だった。機械をいじることにとても興味を示し飲み込みも早かった。

オノカの舟も運転したが、たちまち乗りこなしたのにはオノカもザイショウも大いに驚いたのだった。

夕方店に戻るとザティたちも一段落したところだった。祖母の世話があるためオノカとザティは

いつもこの時間には帰るのだったが名残惜しくしているとルニノが言った。「あなたたちの家にも行ってみたいわ。」

それで決まりだった。四人は楽しく家路を急ぎ、やがて居心地のいい我が家に到着した。

カミュはヘマをしなかったようで家には明かりが灯っていた。ピエリが大喜びで駆け回り子供たちを出迎えた。

ルニノは自然と祖母の世話をしてくれた。ザティとナキトゥは楽しげに畑へと出かけていった。夕食までの間、オノカは工房に引っ込みご機嫌ななめのカミュをメインコンピュータにつないでやった。

オノカの工房は古ぼけた建物を修繕しながら使ってきた場所だった。

物心ついた頃からすでにその建物はあり、長らく人の手が入っていなかったような有り様だった。

いつの間にかオノカはその建物の中で多くの時間を過ごすようになっていった。

ごちゃごちゃした何かの部品が集まったような箇所もあり、幼い頃から親しんできた場所ではあったが未だに混沌としている所も多かった。そんな場所から時に戦利品が見つかったりするのだった。

主に工房として使っている場所の中央には大画面のコンピューターがあった。オノカはメインと呼んでいた。

これも壁に埋もれていたものをオノカが気付き面白半分にいじりながら使えることに気付いた代物だった。

メインは様々な機能が画面には現れるのだがどれも実行はできず、オノカはいつも静止してしまう画面をみてはため息をつきながらその機能がどんなものか想像するのだった。

それでもわずかに使える機能をオノカは大いに楽しんでいた。

さまざまなエンジンやコンピューター機能についてのデータもあり、カミュはこのメインにつながるながら整備、メンテナンスを繰り返し、プログラミングをしてきたのだった。

アダマ船長の船からもちかえた部品はごく小さな黒い箱で、場所を工夫すればカミュ本体に接続できそうだった。

カミュはとにかくこの機能を喜び興奮していた。

「本物ならすべてのコンピューターの暗号を解読できるはずなんです。つまりはすべてのコンピューターの情報にアクセスできるというわけです。もちろんそんなものはるか昔に製造中止になっていたのですが。さすが果ての捨て場、こんなものまで流れ着いているなんて。これに気づいたエン爺もさすがです。」

オノカはカミュの言ってることにはあまり耳を貸さずに接続に集中していた。手に入れた部品がまったく使い物にならなかったことはよくあることだったから話半分に聞いておいたほうがいいのだ。

メインにつないでしばらくすると大画面が動きはじめた。

操作していたオノカはやがて興奮を隠せなくなっていた。

これまで静止してその先に進めなかった項目にアクセスできそうだったからだ。長年、これは一体どんな機能なんだろうと夢見ていたというのに！

そのうちのひとつにアクセスしたオノカは画面に釘付けになった。

これは...ここに映っている映像は...何？

「これは応都全体図ですね。」カミュが言った。「応都全土の地図が見られるなんて。」カミュも興奮していた。

オノカは驚きのあまり言葉が出なかった。

これまで応都全土の地図を見たことはなかった。船乗りたちが持ち込んだ地図は目的地であるそれぞれの地方都市周辺が描かれたものだけだった。首都まで行き来するような船は全土の地図を手に行っているという聞いたことはあったがオノカは見たことはなかった。

「ロイテ島はどこなの？」

カミュに問うと大画面の映像が動きだし、やがて三角形のしるしがひとつの島を指した。

「ふーん、なるほどね、で、カピタリは？」

ロイテ島から飛び立った矢印はどんどん移動し、ロイテ島はすぐに画面から外れていった。矢印はやがて無数の島々が集まっている地域の中央を差して止まった。

「オノカ、食事よ。」

振り向くとそこにはザティと一緒にルニノとナキトゥもいた。

「工房を見たいっていうから...どうかしたの？」

「ザティ、これ見てよ。」オノカは興奮を隠さず言った。

「エン爺からもらってきた部品をつないだら...これ、応都全体の地図よ。」

「応都全体の地図なんて見た事ないわ。これがそうなの？ロイテ島はどこ？」

ザティが言うと同時に画面が動き、三角形の印は再びひとつの島の上で止まった。

「へえー！」ザティも興奮していた。「そうだ、じゃあカピタリは？」

やがて止まった三角形の印をみるとザティはルニノとナキトゥに声をかけた。

「あなたたち、ずいぶん遠くを目指していたのね！そうだ、あなたたちの島はどこなの？」

暫しの沈黙があった。オノカはルニノの顔を見た。ルニノの表情は静かで、オノカとザティのような興奮はなかった。

「あたしたちの島は...」かすれるようなルニノの声だった。

「あたしたちの島はきっと地図には載らないくらいの小さな島なの。」

その口調から、ふと、オノカはルニノは故郷を知られたくないのではと感じた。今は詳しく聞かないほうがいいのかもしれないとも思った。

「私たちの島は地図にも載らないほど小さくて、そして貧しいの。首都カピタリに行けば今なら誰でもカピタリの住民になれる。そして子供達は皆学びたいことは何でも学べる学校へ行けると

「いわ。私たちが学び、カピタリの住民の資格を持つ事は私たちの故郷を救うことになるかもしれない。島の人たちの期待がかかっているのよ。」

ルニノとナキトゥの顔は真剣だった。

オノカの中になんとかして二人をカピタリに連れて行ってやりたいという衝動が湧き起こって来た。

でもどうやって？アダム船長の船は当分戻ってはこない。いやいや、あんな船長のもとに二人を帰してはいけない。それともエン爺とドゥビに頼めばいいかしら？

考えは頭の中をただ廻るばかりだった。

「オノカ、メインを見て。」

カミュの声に我にかえりメインの画面を見ると島の近くに黒く小さな影があり、点滅しながら島に近づいていた。影の近くにはたくさんの文字と数値が次々と映し出されていたがオノカにはさっぱり理解できなかった。

「オノカ、端末を私にも繋いでください。」

オノカが端末をカミュに繋ぐとカミュの胸の辺りにある画面にスイッチが入り、たちまちたくさんの文字と数値が次々と映し出され、同時にカミュの目が赤く点滅し始めた。

やがてカミュが言った。

「解読できました。影は大型船です。所有者はダイ・スカイ船長。乱気流の道が開くのを待たずに突入してくる模様。」

ダイ・スカイ船長！

オノカとザティは顔を見合わせた。

「ザティ！ダイ・スカイ船長よ！そうよ、ダイ・スカイ船長にカピタリに連れていってもらえばいいんだわ！」